福岡女子大学リサーチコア　共同研究
「アジアとジェンダーをめぐる研究の推進」2019-2023

アジアを研究対象とする6名により、共同研究を行った。2022年度は5年間の計画の中で4年目にあたる。研究会を1回開き、また勉強会を兼ねて台湾の専門家を招いてオンライン講演会を開催し、30名程度の参加者を得た。

特別講演会　2023年3月8日（木）15:30～17:00

講師:范雲氏(台湾　現立法委員、イエール大学 博士 社会学)「回首來時路――台灣女性參政的現況(来た道を振り返る――台湾女性の政治参画状況)」通訳、コーディネータ　王貞月氏　司会　宮崎聖子

台湾では民主化以後、在野の民進党が与党になったことから、これまで社会運動に従事してきた女性たちが議員となり、社会に変容をもたらした。また台湾ではクォータ制を積極的に導入していたが、2005年の憲法改正でそれがより明示された。また女性議員の増加で家族やマイノリティに目を向ける法律が整い、目下、同性婚における(血縁関係のない)養子縁組の合法化にとりくんでいる。

インドネシアにおける女性ビジネス・パーソンの台頭

小西　鉄

◆ **背景：保守的なインドネシア社会で、女性のビジネス・パーソンの台頭が顕著**

・伝統的価値規範が根強い：ムスリム（9割）、保守的文化（ジャワ/スンダ人が5割）
・女性の全企業数に対する経営トップ人数割合 22.1% (2015)（World Bank）
・女性の全企業数に対する中堅経営幹部人数割合　38%で第5位 (2022)　cf.日本：15%で29位
・中小零細企業数6420万社：GDPの61%、労働者1.17億人うち64.5%が女性 (World Bank)

◆ **著名な女性社長/CEOと分野**

Aulia Halimatussadiah（自費出版プラットフォーム）
Diajeng Lestari（ヒジャブ、化粧品）
Febriany Eddy　（鉱物大手）
Martha Tilaar（化粧品）
Mutiara　（医療サービス大手）
Nurhayati Subakat　（化粧品）
Nabilah Alsagoff　（フィンテック）
Veronika Linardi　（雇用プラットフォーム）
Hanifa Ambadar　（IT）
Grace Tahir　（医療プラットフォーム）
Catherine Hindra Sutjahyo　（ファッション、eコマース）
Susi Pudjiastuti　(航空業)（元海洋水産大臣）

リサーチコアA「アジアにおける女性のリーダーシップと社会変容」2022年度報告書

インドネシアにおける女性ビジネス・パーソンの台頭（小西）

◆問題意識

伝統的価値規範が根強いインドネシア社会で、女性のビジネス進出が目覚ましい要因は何か。

・意義：社会の価値規範のみが女性の社会進出を促進/阻害する要因なのかを問う
・仮説：
　①属人的要因：　家族・宗教組織・社会団体・政党・大学？
　②純ビジネス要因：　産業（第1～3次）、規模、
　　地理（首都圏／それ以外、都市／地方、ジャワ／外島）
　　資金調達（グローバル／国内）

◆調査・分析方法

①データベースの作成
　・経営者情報：出身、民族、宗教、所属団体、支持政党、近親者
　・企業情報：　設立年、本拠地、従事産業、資本金、資産、売上、経済・金融危機への対処
②分析対象の取捨選別・定義
　「経営者」・・・どこまでのポジションを入れるか？
　「台頭」・・・資産規模上位100位？ 上場？or 社内ポジションの上昇？
　各要因をどのように図るか？（→資金調達構造）

＊「経営者」ポジションの例:
CEO／代表取締役社長・会長・その他代表、COO、CFO、CIO、取締役人事部長、CMO、取締役経営企画部長、財務部長、経理部長、営業部長、パートナー、共同出資者、共同経営者

リサーチコアA「アジアにおける女性のリーダーシップと社会変容」2022年度報告書

インドネシアにおける女性ビジネス・パーソンの台頭（小西）

◆ 仮説：eコマースでの女性活躍

・家族要因：家族の反対、保守的思考（⇒これを上回るポジティブ要因とは？）
　　家族の支援、所属組織の支援（⇒どういった属性で？）
・個人要因：妊娠・出産を機に退職した後、インターネット活用でキャリア再開・創業。
・社会要因：スマートフォンの出現 ⇒ DX ⇒（コロナ禍）　⇒ DXのさらなる発展
・金融要因：世界的な金融緩和　⇒　カネ余り
　　インドネシアは歴史的に中小企業支援枠組みは充実
　　ecはビジネスとして低コスト

★国際金融機関（世銀、アジア開銀）のHP

（世銀のウェビナー「デジタル時代の女性」2023年3月8日）

リサーチコアA「アジアにおける女性のリーダーシップと社会変容」2022年度報告書

「PTAと女性の社会進出に関する研究」（木村貴）

＜研究の目的＞

1）社会の変動に伴いPTAが直面している課題について検証し、

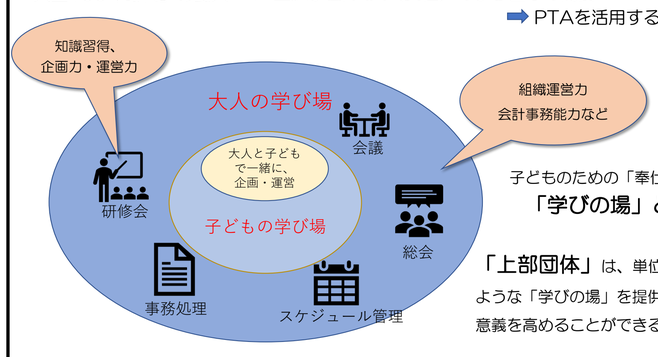
2）現代社会におけるPTAの新たな機能、特に女性の社会進出・リーダーシップ涵養における PTAの可能性について検討する。

＜主なPTA批判の内容＞
①強制（自動）加入、活動の強制・義務化　→「違法PTA」
②前例踏襲による無駄な活動、目的の不明性　→「PTA不要論」

＜「PTA改革」の事例＞
①入会・退会届の整備、ボランティア制の導入
②活動の見直し・スリム化、外部組織への外注
③上部団体からの脱退

＜今後のPTAの可能性『PTA2.0』＞

「人生100年時代」の到来 ➡ 生涯学習/大人（女性）の学び直しの需要
➡ PTAを活用することはできないか？



子どものための「奉仕の場」としてのPTAから
「学びの場」としてのPTAへ

「上部団体」は、単位PTAでは企画できないような「学びの場」を提供することで、その存在意義を高めることができる。

PTA活動の中では無意識のうちに、多くの学びを得ている

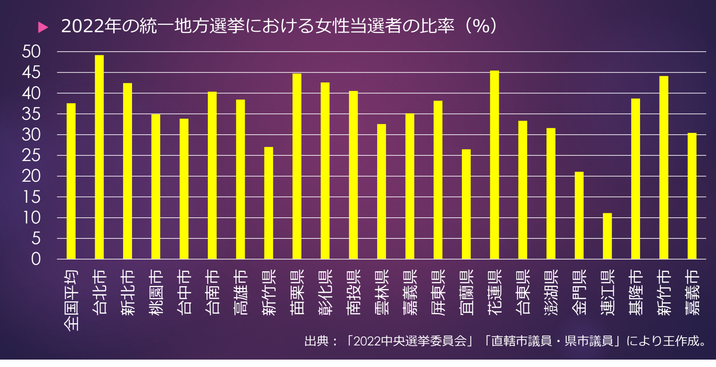
台湾女性の政治参画について
―「おばさん連盟」の事例から　王貞月

- 2018年統一地方選挙に、NPO教育団体からのママたちは、「おばさん連盟」を組織し、21名の候補者を立てたが、全員が落選した。
- 2022年統一地方選挙に、19年に結成した「小民參政歐巴桑聯盟」という政党で、15名の候補者を擁立し、9割が女性であった。

出典：歐巴桑聯盟-生活政治小民進擊Fbより

台湾女性の政治参画について
―「おばさん連盟」の事例から　王貞月

- 2022年の統一地方選挙における女性当選者の比率（%）



出典：「2022中央選挙委員会」「直轄市議員・県市議員」により王作成。

台湾における女性の社会参画について(宮崎聖子担当①)

①台湾における女性の企業活動を象徴するとされた「頭家娘」(社長の妻、女性社長という意味、タウケーニュウ、トウジアニャン)をめぐる文献渉猟を国家図書館、台湾大学図書館を中心に行い、主な関連書籍、論文は20篇ほどを得た。

かつては、アジアの四小龍の台湾経済を支えた家族経営企業における女性の役割という意味合いが強かったが、グローバル化、台湾社会の民主化により「頭家娘」のあり方、とらえ方自体もこの30年間で変化している。ここでは「頭家娘」研究の史的考察を試みる。

日本においても数は少ないが中小企業の女性、女性起業家、旅館などのおかみさんの研究があり、それと相互参照すると面白い。

植民地期台湾における女性の登用　(宮崎聖子担当②)

②日本植民地期台湾における被支配女性の登用について、台北州と鶯歌庄について、文献資料に基づき分析を行った。

台北州鶯歌庄は日本支配下で最も早く社会教化に取り組んだ地域である。

統治者が近代化をすすめる中で、教化の初歩段階としての1920年代後半の社会教育においては、女性が女性を教えるシステムをとっていた。日本支配と表裏一体となった近代化を受け入れることで、地域における女性の社会参画が進むが、一方で女性は特に支配者層にとりこまれる。

女性の置かれた状況を検討する際(小さな地域においても)、エスニシティや宗主国との関係、階層の問題を検討の射程に入れる必要性がある。

在日中国人女性の家庭生活と社会進出について

（宗暁蓮担当）

前年に引き続き、すでにラポールを構築している在日中国人女性にインタビューし、彼女たちが家庭・仕事面で直面してきた／している問題、自己定義のあり方や、自己をめぐる社会・家庭役割の認知と実践などについて、個人のライフストーリーから明らかにする可能性を模索した。

調査対象		学歴	婚姻状況・子供の有無	就職状況
60代	A氏	大卒（中国）	日本人夫、息子2人	専業主婦→パート
	B氏	高卒（中国）	日本人夫、娘１人	専業主婦→自営業の手伝い
50代	C氏	博士（日本）	中国人夫、息子1人	会社員
	D氏	博士（日本）	独身	大学教員
	E氏	大卒（中国）	日本人夫、娘１人、息子1人	専業主婦→パート
40代	F氏	博士（日本）	中国人夫、息子1人	大学非常勤講師
	G氏	大卒（中国）	中国人夫、息子1人、娘1人	専業主婦→派遣社員
	H氏	修士（中国）	日本人夫との間に息子1人；アメリカ人夫との間に娘１人	専業主婦→パート→アメリカで料理店を営む
	I氏	大卒（中国）	日本人夫、息子1人、娘1人	専業主婦→中国料理店を営む
	J氏	修士（日本）	日本人夫、娘1人	会社員→日本語学校を設立
	K氏	博士（日本）	中国人夫、息子2人	大学非常勤講師
30代	L氏	大卒（中国）	日本人夫、息子2人	家事とパートeコマースショップを経営
	M氏	修士（日本）	日本人夫、息子1人	会社員→eコマースショップを経営
	N氏	修士（日本）	日本人夫、娘1人	専業主婦→パート
	O氏	修士（日本）	中国人夫、娘1人	会社員
	P氏	修士（日本）	中国人夫、子供作る予定ない	会社員→パート
	Q氏	修士（日本）	独身	帰国したが、結婚の圧力で日本に戻りたい
20代	R氏	大卒（中国）	独身	派遣社員
	S氏	修士（日本）	中国人夫、子供まだいない	社員

- 日本で暮らす中国人女性は、**教育程度・日本語レベル、自分の人生設計、夫の仕事・収入、夫及び夫の親族との関係状況、周りの中国人の知り合いを含めた社会ネットワークの有無**などによって、生活様式、ワークライフバランスのとり方、自分の満足度などが大きく異なることをインタビューの分析から指摘できる。
- インタビューに協力してくれた18人は、かつて身につけた「男女平等」、「社会進出」などの価値観を引継ぎながら、自分と同世代の日本の女性の生き方、日本社会の考え方などの影響も大きく受けている。18人全員が常に専業主婦でいることについて否定的である。彼女たちにとって、子育て期間中は家庭を中心としつつも、それを「専業主婦」として捉えるのではなく、次のキャリアへの準備階段であると理解するのが正しいかもしれない。18人の中５人が子育て一段落後に自分で起業し、現在全員働いている。**中国における「男女平等」、「社会進出」をそのまま体現しているのではなく、むしろ日本においてアレンジされた、その時々の家庭や子育ての状況により調整されるところの、社会貢献を通じた自己認識、社会へつながる回路としての仕事という側面が強く意識された仕事観となっている。**「男女平等」の理念以前に、家庭という個々の状況があってはじめて自己が位置付けられている、という点が重要である。
- この40年間、日中間の経済状況、国家関係などの劇的な変化を背景に、**20・30代と50・60代の在日中国人女性の考え方は大きく異なっている。**20・30代のインフォーマントは家庭や仕事に没頭するより、好きな事で自分の人生を楽しむ人が多くなった、と指摘できる。これは、年代別の傾向を反映しているのか、在日時間の長さに影響を受けているのかは今後の検討項目とする。

フィリピンにおける女性の政治参画　（国際教養学科　山根健至）

イメージ：「女性の社会進出が進んでいそう」

2022年のノーベル平和賞にフィリピン人の女性が選ばれる。2022年の大統領選挙では副大統領に女性が選ばれる。

指数：ジェンダーギャップ指数

19位（2022年）アジアで断トツに高い

（次点が49位のシンガポール）

政治分野の指数

ジェンダーギャップ指数　分野別指標（2022）や

UN Womenの「Women in Politics」（2023）など

による指標では、アジアでトップクラス。

女性の政治指導者

女性大統領（2名）

女性副大統領（3名・現職1名含む）

⇒政治参画が進んでいそう

女性閣僚の数（2023年）

	国	%
1（65）	フィリピン	26.3
2（92）	インドネシア	20.7
3（104）	ラオス	17.6
4（111）	マレーシア	16.7
	韓国	
6（120）	東ティモール	15.8
7（135）	シンガポール	13.3
8（145）	ブルネイ	11.1
	カンボジア	
	ベトナム	
11（164）	日本	8.3
12（175）	タイ	5.3
13（180）	中国	4.2
データなし	北朝鮮	
	ミャンマー	

女性国会議員の数（2023年）

	国	%
1（28）	東ティモール	40.0
2（64）	ベトナム	30.3
3（68）	シンガポール	29.1
4（85）	フィリピン	27.3
5（95）	中国	24.9
6（103）	ラオス	22.0
7（105）	インドネシア	21.6
8（108）	カンボジア	20.8
9（120）	韓国	19.1
10（130）	北朝鮮	17.6
11（136）	タイ	16.6
12（150）	マレーシア	13.5
13（164）	日本	10.0
14（165）	ブルネイ	9.1
データなし	ミャンマー	

（出典：UN Women, *Women in Politics 2023*より筆者作成）

フィリピンにおける女性の政治参画

一方で、UN Womenの「Women in Politics」でのランキングの推移（表）をみると、近年、女性議員の割合が増加しているベトナム、シンガポール、インドネシアなどに比べて、停滞状況が看取できる。

＝フィリピンにおける女性の政治参画は、国会への進出という局面に焦点を当てた場合、頭打ち、あるいは下降傾向であると評価できる。

「頭打ち」の背景

〇「エリート民主主義」

女性の政治家の出自：エリート一族

＃　一般の女性に幅広く門戸が開かれている状況ではない

＃　エリート一族の中でも予備的な役割として政治家になる

〇知名度がモノをいう選挙

無名の女性は厳しい

〇「政党名簿制」が骨抜き状態

理念が形がい化し、エリート一族に乗っ取られる

研究に関する今後の着目点

〇議員になること以外の政治参画

〇地方政治

表：国会議員に占める女性議員の割合（女性議員／総議席）

	フィリピン	ベトナム	シンガポール	インドネシア
2017年	29.5 (86/292)	26.7 (132/494)	23.8 (24/101)	19.8 (111/ 560)
2019年	29.5 (86/292)	26.7 (132/494)	23.0 (23/100)	18.2 (102/560)
2020年	28.0 (85/304)	26.7 (132/494)	24.0 (24/100)	20.3 (117/575)
2023年	27.3 (85/311)	30.3 (151/499)	29.1 (30/103)	21.6 (124/575)

（出典：UN Women, *Women in Politics: 2017, 2019, 2020, 2023*より筆者作成）